

音韻論的角度からみた「オトトイ」と「オトツイ」

王竣磊

昨日の前の日と意味する和語は「オトトイ」と「オトツイ」という二つの語形を持っており、歴史上その間に位相差が存在していた。近世中期まで中央語における両語形の変化図式は、先行研究によって「オトツイ>オトトイ>オトトイ（上層）・オトツイ（下層）」とまとめられたものの、語形変化の原因、特に下層でオトツイが新たに出現した原因を究明することが期待されている。また、位相差の構造についてもさらに研究する余地がある。本発表は音韻論的角度から上述の所謂二回目の語形変化の原因並びに位相差発生の原因について考察した。

まず音声変化の角度から、下層におけるオトトイからオトツイへの語形変化は院政期から鎌倉時代までのある時期に音変化によって起こったのではないか、という仮説を立てた。本発表はその検証に重点を置き、観智院本『類聚名義抄』を中心とする平安・鎌倉時代の古辞書から次の 14 例を抜き出し、それぞれ分析した。

「禪」シタモーシタム	「歴草」ソフキーソホキ	「石檀」タモノキータムキ	「準准」ナズラフーナズラフ
「棺」ヒトギーヒツギ	「葎」ムグラーモグラ	「肫」モモギーモムキームムギ	「弓緒」ユトリーユツリ
「弱」ヨハシーユハシ	「暮」ユフバーヨフベ	「指」ユビーオヨビ	「針魚」ヨロドーヨロヅ
「劣」ワロシーワルシ	「牛膝」キノクヅチーキノコヅチ		

不完全な調査でありながら、二点の結論を得た。(1) 当時の日本語の音韻の実態として一部の語におけるオ段音とウ段音との交替が認められる。(2) 位相差はある種の発音の区別によって生じうる。それを踏まえて、下層部におけるオトトイからオトツイへの変化は音変化に求められるものであり、位相差はまさにその発音の区別によるものであるという結論に至った。本発表は語彙史の面のみならず、古辞書の和訓にみられるオ段音とウ段音との交替という現象についても報告し、今後の課題として提起した。